

新しい時代の葬送のかたち

新型コロナウイルスの猛威は、葬儀にも影響を及ぼしています。

“ウィズ・コロナ”の今、どうすれば最善の見送りができるのか。

家族で話し合ってみませんか。

コロナ時代の葬送とは

日本国内では、今年の3月頃から猛威を振るい始めた新型コロナウイルス感染症。〝3密〟を避けるなどの新しい生活様式の継続が求められる中、その影響は葬儀にも広がりを見せています。ウィズ・コロナの今、葬儀はどうあるべきなのでしょう。か。(株)清月記 代表取締役社長の菅原裕典さんにお話を伺いました。

本来の葬儀が 望めない状況

「緊急事態宣言中は、従来のような葬儀をしたくてもできないし、参列したくても

も行けない。主催者と参列者には、そんなジレンマが生じていました」と菅原さんは振り返ります。外出自粛が求められている中、無理をして参列してもらう懸念や葬儀そのものが感染源となってしまうことへの不安から、少人数による密葬を行う人が一時的に増えたといえます。他県では、ネット上で葬儀に参列する「オンライン葬」や車に乗車したまま参列する「ドライブスルー葬」など、接触を回避する葬儀も話題となりました。

故人の思いが伝わる、 悔いのない葬儀を

コロナ禍にある現在の葬儀のあり方について、菅原さんは「東日本大震災での経験からも言えることです。が、どんな状況にあっても大切な人をきちんと見送りたいと願わない人はいません。その気持ちをくみ取り、後悔のない葬儀をご提案したい」と話します。例えば、

大きな葬儀ができないのであれば、一周忌に知人を招いて法要を行う。精進落としができない場合は、重箱で料理を持ち帰ってもらう。現状は厳しくても、そんな心配りが最善の葬儀につながると思います。「コロナ禍だから簡略した葬儀でいい」というのではなく、どうすれば故人の思いが伝えられるのか。そこに思いをはせることが大切なのではないでしょうか。

長寿のお祝いで、 その先の人生を元気に

今回のコロナ禍では、ウイルスという目には見えないうものに日常を奪われる恐怖を誰もが感じているのではないのでしょうか。連休やお盆の帰省ですら、ためらう現状が続いています。こんな時代だからこそ、日頃から大切な人と集い、感謝や思いを伝え合うことが大切なのかもしれません。菅原さんは「日本では60歳の還暦から100歳の百寿ま

で長寿を祝う、良い文化があります。そんな人生の節目や家族の記念日に親戚や職場の同僚、旧友など、大切な人たちを招いて会食や語らいを楽しむことも、その先の人生に活力を与えてくれるはずです」と話します。悲しみではなく、喜びに包まれるかけがえのない時間を思い出し、今後は、こんな笑顔あふれるセレモニーを選択する人が増えるかもしれません。



式場でも座席の間隔を十分に空けるなどの対策を徹底。安心してお見送りができる



葬儀会場では手指の消毒やマスクの着用、サーモグラフィーカメラによる体温測定を行い、感染予防対策を行っている



参列できない人に向けた「葬儀のライブ配信」や「香典代行」が好評を得ている

取材協力

(株)清月記 <http://www.seigetsuki.co.jp>